

中国学界における清代中日文化交流史研究の回顧

呂 順長*

清代の中日文化交流に関する研究は、中国の学界において早くも清朝末期から始まっていた。その後、百年以上の間、中日関係と中国の国内状況の変化に影響されつつも、中断されたことはなく、すでに膨大な研究成果が蓄積されている。本稿では、清末・中華民国時代、中華人民共和国成立後の現代という二つの時期に分けて、この研究分野で、中国の学界が主にどのような研究成果を上げてきたかを紹介する。

キーワード：日清、日中文化交流、日中関係、中国人留学生

はじめに

文化交流史は、国家間あるいは地域間の文化的交流の諸相を研究する歴史学の一分野で、中国の学科系統においては普通「専門史」に分類される。

「文化」という概念は幅広い分野をカバーするので、研究者が中日¹文化交流史の研究対象を定義するとき、その範囲が曖昧な場合が時折見られる。例えば、「中日文化交流」を掲げる論著の内容を見ると、狭い意味での文化を指す場合もあれば、中日両国の政治関係、経済往来、軍事闘争、外交活動などが含まれる場合もある。

さらに、中日関係史、中日文化関係史、中日文化交流史などの似たような専門用語がある。中日関係史は通常、中日両国の政治往来、経済交流及び文化伝播などの相互関係に関わる歴史であり、中日文化関係史は中日関係史の中の文化関係の歴史であると考えてよからう。しかし、中日文化交流史と中日文化関係史はその類似性が高く、実際「中日文化関係」と名乗りながらその内容はほぼ中日文化交流に限定する書籍も見受けられる。譚汝謙の『近代中日文化関係研究』²、周一良の『中日文化関係史論』³、胡令遠の『文明の共振と発

* 浙江工商大学 教授

1 中国語の論考では通常「日中」のことを「中日」と呼ぶので、本稿でも便宜上その習慣に従う。

2 譚汝謙《近代中日文化關係研究》、香港日本研究所、1988年。

3 周一良《中日文化关系史論》、江西人民出版社、1990年。

展——中日文化関係研究』⁴がその例である。しかし両者には微妙な違いがあり、中日文化交流史の研究対象は文化交流の過程や内容を主とするもの、中日文化関係史の研究対象は交流により形成された文化の相互的影響と融合の關係に重点を置くべきものであろうと思われる。

劉徳有は「中日關係史は、ある意味で中日文化交流史でもある」と指摘した⁵。近代に至るまでの中日両国の交流史を見ると、両国の文化交流は、政治往来や經濟交流よりはるかに多く、古代においてこの指摘はほぼふさわしい論断であろう。例えば、汪向榮の『古代中日關係史話』⁶は「中日關係史」を掲げながら、収録した17篇の論考には、「漢字」「金印」「徐福渡日」「茶道」「唐朝に仕官した日本人」「入宋僧の成尋」など、一般的な意味での中日文化交流史の内容が並んでいる。もう一例を挙げれば、1980年代に設立された中国の中日關係史研究会の早期の機関誌『中日關係史研究』には、中日文化交流史に関する論文が多く掲載されていた。

しかし、近代における中日關係は古代とは大きく状況が違う。両国の關係における政治・外交關係の比重が文化交流より高まったのである。近代以降の政治と外交の關係をも中日文化交流の歴史として扱うのは、容易ではあるまい。

中日文化交流の歴史を研究する際、日本文化と中国文化の關係を正しく理解することも重要であろう。この問題についての見解は人によってしばしば異なっている。近現代においても多くの中国人は、古代の日本文化は単なる中国文化の移植であり、明治時代に入ってから西洋文化が輸入されて日本文化の一部になったとし、日本文化は中国文化と西洋文化の単なる模倣であると考えている。この問題に関して、日本に長く留学していた周作人は、「日本にいたとき、私達は、日本という国はエキゾチックとクラシックが五分五分で、そのクラシックがエキゾチックな環境の中に健全に生きていた」と感じていた。⁷と述べていた。「半分はエキゾチック」とは中国とは違う独自の日本文化で、「半分はクラシック」とは古代の中国文化が日本に大きく影響していることである。両方がバランスよく保たれているという、的を射た表現と言えよう。

中日両国は、少なくとも二千年以上の文化交流の歴史がある。清の時代は、17世紀から19世紀半ばにかけて、お互いの鎖国体制により、両国間の文化交流が大きく妨げられた。しかし、外力により両国が相次いで開国し、さらに1871年には中日修好条規⁸が結ばれ、清朝末期の中日文化交流は、往来の人数も交流内容の幅と深さも隋唐時代を遙かに超えた。また中国文化が日本に影響を与えた隋唐時代と違い、近代化に成功した日本を通じて中国が西洋の近代科学技術と文化を導入したことが大きな特徴である。

このような清の時代の中日文化交流に関する研究は、中国では早くも清朝末期から始ま

4 胡令远《文明的共振与发展：中日文化关系研究》、时事出版社、2003年。

5 滕军等编著《中日文化交流史：考察与研究》（刘徳有序）、北京大学出版社、2011年、1頁。

6 汪向榮《古代中日关系史话》、中国青年出版社、1999年。

7 钟书河编《周作人文类编⑦・日本管窥》、湖南文艺出版社、1998年、28頁。

8 中国語の論考では「日清修好条規」のことを通常「中日修好条規」と呼ぶので、本稿でも便宜上その習慣に従う。

っていた。その後、百年以上の間、中日関係と中国の国内状況の変化に影響されつつも、研究が中断されたことはなく、すでに膨大な研究成果が蓄積されている。本稿では、清末・中華民国時代、新中国成立後の現代という大きく二つの時期に分けて、この分野で、中国の学界が主にどのような研究成果を上げてきたかを紹介する。中日文化交流史と中日関係史に関する研究は切っても切れない関係にあるので、本稿では「中日関係史に関する研究」と題した内容も時折取り上げる。また紙幅の制約もあり、膨大な研究成果の中から一部しか取り上げることができず、取り上げた成果でも一部はタイトルしか紹介できない場合があるので理解されたい。

1、清末・中華民国時代における清朝の中日文化交流史に関する研究

(1) 清朝末期の研究

清朝の中日文化交流史に対する研究は清朝末期から始まったもので、たとえば、『吾妻鏡補』⁹『清朝柔遠記』¹⁰『日本国志』¹¹『日本源流考』¹²などの著書がその交流の一部を取り上げている。

翁広平の著書『吾妻鏡補』（全30巻、1814）は地理志・通商条規・職官志など、内容別に分けられており、清朝前期・中期における中日文化交流に関する内容も多く取り上げられている。例えば、「通商条規」巻では、徳川幕府により打ち出された長崎中日貿易政策に関する内容が多く記載されているのに対し、「風土志」などの巻では、『海国見聞録』（陳倫炯、1730）、『袖海篇』（汪鵬、1764）といった、清朝前期・中期の日本に関する著書が紹介されている。

王之春の著書『清朝柔遠記』（1879）は、編年体形式で1644年から1874年までの二百年余りの間における清朝と海外との交流史を記載している。同時代の人物による著書なので、時代感が色濃く出ている。さらに一次資料が多く使用されているため、信憑性も高い。中日交流についての内容として、例えば1728年（雍正6）に浙江省総督の李衛が日本に対する警戒を強めるよう上奏したこと、1871年（同治10）に日本と修好条規を結んだことが挙げられる。しかし、清朝と日本との交流が長崎貿易に限定されていたので、中国人の日本に対する理解が不十分なところもあり、それが同書でも時折見られる。例えば、陳倫炯の『海国見聞録』（1730）の影響を受け、同書でも日本のことを対馬、長崎、薩摩（薩摩）という三つの島からなっていると書かれている。

黄遵憲の著書『日本国志』（1887）の「隣交志」（第4巻から第8巻まで）では、日本における中国や欧米諸国との交流について、簡潔にまとめられている。特に第6巻では、清代における日本と中国の交流に重点が置かれている。また他の巻でも、清代の日本と中国の交流に関する内容が多く含まれている。例えば、「物産志」（第38巻から第39巻まで）では、

9 王宝平編著『吾妻鏡補——中国人による最初の日本通史』、朋友書店、1997年。

10 王之春撰、趙春晨點校《清朝柔遠記》、中華書局、1989年。

11 黄遵憲撰、王寶平編《日本國志》、上海古籍出版社、2001年。

12 王先謙撰、龔抗云整理《日本源流考》、湖南大学出版社、2020年。

日本が明治時代に中国の製茶業を視察すると同時に、製茶の中国人技師を招き、中国茶の種を買い求めるため、中国の湖北省、福建省、浙江省へ視察者を派遣したことが記録されている。

王先謙の著書『日本源流考』（全22巻、1901）では、中国歴代の史籍の中の日本に関する資料と一部の日本の史籍に基づき、編年体形式で1854年の日本開国から1893年（明治26）までの歴史を記録している。例えばその中には、1870年から1871年に中日修好条規と通商章程の締結交渉のため日本が清国に使節を派遣した経緯（巻20）、1877年に初代駐日公使の何如璋が使節団を率いて日本に赴いた経緯（巻21）など、詳細な内容が記載されている。

また、清代は、中日両国が正式な外交関係を樹立し、両国間の人的往来と文化交流が急速に増えた時代でもある。これを背景に、清朝の中日文化交流の実況を記した中国人の日本旅行記、日本で作られた詩文集、日本人との筆談記録が多く残っている。また『策輦雜摭』（葉慶頤、1887）、『東槎聞見録』（陳家麟、1887）、『日本新政考』（顧厚焜、1888）、『遊歴日本図経』（傅雲龍、1889）などの日本研究に関する著作も数多く刊行されている。

（2）中華民国時代の研究

中華民国時代には、日本による中国侵略が激化し、中日両国関係と歴史に対する国民の関心が高まったことから、中日関係史を研究する著作が大量に出版され、その多くは清朝における中日文化交流史の研究が含まれていた。

劉岳兵が指摘しているように、この時期の研究者の政治的立場が複雑で、知日派や抗日派がいれば、親日派、さらには降伏派もいた¹³。例えば、1930、1940年代から中日関係史の研究に取り組み、のちにこの分野の大家となる梁盛志（梁容若）、汪向荣、楊鴻烈は、その特殊な時代の影響を受け、親日的な言論をしばしば発していた。したがって、この時期の研究著作を読む前に、著者の政治的立場と執筆目的を明らかにする必要がある。

以下、この時期の主な著作を簡単に紹介しておく。

中華書局編の『二十年来の中日関係』¹⁴は、清末の約二十年間の中日関係を「中日戦争」「拳匪の禍」「日露戦争」の三章に分けて記したものである。同書の「叙言」に「ここ二十年来の中日交渉史を読んで、憤然として悲しみ、毅然として奮うことのない者は、必ずや気骨のある人間ではない」と述べたとおり、この本は、日本が中国に「二十一カ条」を強要した直後に刊行されたもので、国民に歴史を鑑とし、日本を警戒するよう呼びかける狙いがあった。

国民外交叢書社が編集した『近代中日関係略史』¹⁵では、甲午戦争¹⁶の勃発、二十一カ条

13 劉岳兵《“中国式”日本研究的实像与虚像：重建中国日本研究相关学术传统的初步考察》、中国社会科学出版社、2015年、125頁。

14 中華書局編輯、黃鴻壽校閱《二十年来之中日關係》、中華書局、1917年。

15 国民外交叢書社編輯、左舜生校閱《近代中日關係略史》、中華書局、1924年。

16 中国語の論考では「日清戦争」のことを通常「甲午戦争」と呼ぶので、本稿でも便宜上その習慣に従う。

の強要という二つの歴史的事件を境に三つの段階に分けて日本の侵略事実を述べた上で、1871年中日修好条規の締結から1924年現在までの約五十年間の中日関係を概論し、「国民外交に携わる者に、簡明かつ正確に歴史的背景を知ってもらうこと」を刊行の目的としている。

舒新城の『近代中国留学史』¹⁷は、1870年（同治9）から1926年（民国15）までの期間中、中国人が欧米や日本などへ留学した歴史を記したものである。その中で、清朝末期における中国人の日本留学については、日本留学政策の成立、日本留学ブームの起因とその状況、官吏や民間人の日本遊歴、女子留学生の状況、日本留学資格及び留学資金、留学管理、留学奨励などの内容が含まれており、近代における中国人日本留学生の歴史を体系的にまとめた最初の研究とされる。

王芸生の『六十年来の中国と日本』¹⁸は、全7巻（1979～1982年に北京生活・読書・新知三聯書店により全8巻に改訂）からなり、1871年の中日修好条規の締結から1919年のパリ講和会議までの48年間の中日関係を紹介したものである。戦争の影響で60年間のうち最後の12年間（1919年から1931年の満州事変まで）の内容が未完成となっている。本書の特徴は、まず出版目的が明確であることだ。満州事変後、著者と同じく「大公報」社に勤務している仲間たちは近代以降の中日関係を振り返ることにより、国民全員に数十年来国が受けた恥辱を分からせ、奮い立たせようとして、この本の出版を企画したのである。次に、歴史的資料が豊富で、関連資料を多数引用している。そして、中日両国の政治外交関係に焦点を当て、近代における日本の中国侵略に関する研究がしっかり行われている。一方で両国の文化交流についてはあまり触れていない。この本の内容は、単行本が出される前に、1931年から3年間にわたり、『大公報』に連載されていた。また日本では長野勲・波多野乾一の翻訳による『日支外交六十年史』（第1巻～第4巻、建設社、1933～1936）がある。

歴史学者の呉錦海は、日本人の東洋史学者である中山久四郎の研究を踏まえ、『日本近代文化と中国』¹⁹をまとめ、徳川時代の二百数十年間に中国文化が日本に与えた影響を儒教、歴史、文学などの面から説明し、徳川時代における日本人の中国文化に対する尊敬の念は、現在の西洋文化に劣らず、むしろ強かったと強調した。

王輯五の『中国日本交通史』²⁰は、日本人研究者木宮泰彦の『日支交通史』（1926～1927）などの著作を参考にして、中日両国の交渉史を15章に分けて簡潔にまとめたものである。そのうち、第13章では、清の時代における中日交渉について詳述している。また、第15章では、清朝初期における中国文化の日本への影響、清朝末期以降における日本の政治・文化の中国への影響を取り上げて論述し、「清日両国の交流は非常に頻繁で、文化と政治は相互に影響し合っていた。清朝初期には多くの僧侶や学者が日本に赴き、仏典、仏像及び各種の書籍も日本に広く伝わっていたため、日本文化に大きな影響を与えた。清朝中期以降、明治維新の成功に鑑み、数多くの中国人が日本に留学したり視察したりして、日本の

17 舒新城編《近代中国留学史》、中華書局、1927年。

18 王芸生纂輯《六十年来中国與日本》、大公報社出版部、1932～1934年。

19 呉錦海《日本近代文化與中國》、日本評論社、1934年。

20 王輯五《中國日本交通史》（1937年商務印書館版影印本）、上海書店、1984年。

富国強兵の方法を取り入れ、日本の維新改革の影響を大きく受けた」と指摘している²¹。著者の王輯五（1900～1981）は、中日関係史の専門家であり、1926年に日本に留学して広島文理科大学歴史学部に入學し、1933年に卒業して帰国した後、北平師範大学などの学校の教員となり、中日関係史、日本史の研究に取り組み、1949年以降、山西大学歴史学部の教授を長く務めていた。

陳博文の著書『中日外交史』²²は、『新時代史地叢書』（蔡元培、呉敬恒、王岫廬主編）の1冊として1928年5月に出版された。また徐正学の著書『中日外交史』は、『公民常識叢書』として1938年7月に正報館から出版されている。この2冊は書名が同じで、1928年頃までの内容と章の構成も非常に類似している。出版時期から見て、徐正学の『中日外交史』は陳博文の著書を大いに参考したと見られる。

楊鴻烈の長編論文「中日文化交流の回顧と前望」²³（1940）は、『華文大阪毎日』第34号から第36号（1940年3月～4月）に掲載されていたものである。『華文大阪毎日』は日本の対中宣伝誌として1938年に大阪毎日新聞社と東京日日新聞社によって創刊された半月刊誌で、1945年5月に廃刊となった。この論文は同年、高倉克己によって日本語に翻訳された後、単行本として立命館出版部から出版され、書名は『中日文化交流の回顧と前望』となっている。前述のように、著者は明らかに親日傾向の政治的立場に立っていたので、それが同書にも反映されている。同書の日本語版の「著者序」に述べられているように、著者は「中国の底なしの抗戦の暗い前途を痛感した」だけでなく、日本の対中侵略は「中日両民族間のわだかまりと誤解」によるものであると考えたのである。中日文化交流の歴史を体系的かつ全面的に回顧するものではなく、まとまりのない内容となっている。

林肇蕪の『中日関係史』²⁴は、全60章を上下2巻に収録し、古代から1940年汪兆銘政權²⁵が日本と「日華基本条約」を締結するまでの中日関係を述べたものである。古代の部分は簡略であるが、清の同治年間以降の中日関係については詳しく解説されている。

梁盛志の『漢学の東漸に関する一連の考察』²⁶には、梁盛志の論文16篇が収録され、清朝の中日文化交流史に関連する論文も含まれる。これらの論文の多くは後に改訂され、梁容若（即ち梁盛志）著『中日文化交流史論』²⁷に収録されている。

汪向榮の『中日交渉年表』²⁸は、「主に中国の正史に基づき、日本の正史と中国の野史を参考とし、さらに近年の歴史学者の研究成果を加えてまとめた」²⁹もので、日本の神代から1937年7月7日までの中日外交の内容を年表の形で記録している。1942年4月、この年表は「中日交渉二千年年表」と題して、はじめて『中国公論』（中国公論社、1939年北京で創

21 同上書、216頁。

22 陳博文《中日外交史》、商務印書館、1928年。

23 掲載時の論文名は「中日文化交流的回顾與前瞻」。

24 林肇蕪《中日關係史》（上下冊）、福建省政府教育廳編輯委員會、1943年。

25 中国では通常「汪偽政權」と呼ぶ。

26 梁盛志《漢學東漸叢考》、中国留日同學會、1944年。

27 梁容若《中日文化交流史論》、商務印書館、1985年。

28 汪向榮《中日交渉年表》、中國公論社、1945年。

29 同上書、「前言」。

刊) 第7巻第1号に掲載され、その後は、「増訂中日交渉年表」と題して、『中日文化』（中日文化協会、1941年南京で創刊）に1942年第9号より連載されていた。中国公論社も中日文化協会も日本の傀儡政権に所属する文化団体である。同書の序文を書いた中国公論社の編集者である張域寧（日本敗戦後に張道梁と改名）も親日派であった。序文の中で、日本の中国に対する侵略戦争は「相互認識の不足が原因」で、「戦争が長く続いたのは、言うまでもなく皆が反省の念を持たなかったからである」と親日的な言論を発している。しかし、『中日交渉年表』に対しては、「2年余の調査と資料収集を経て、本書のような体系的な年表を作成した。これは中日交渉史上初めての壮挙とも言える」³⁰と、おおむね客観的に評価している。

北平故宮博物院により編纂された『清光緒朝中日交渉史料』³¹と『清宣統朝中日交渉史料』³²は、清代の軍機処の各種資料をもとに、年代順に配列し、それぞれタイトルと日付を記し、清の光緒・宣統年間の中日関係の資料を系統的に収録したものである。また、王彦威と王亮が編纂した『清季外交史料』³³（1935）は、光緒・宣統年間の清朝の軍機処と外務部の外交史料を収録している。

2、現代における清朝中日文化交流史に関する研究

新中国成立後の清朝における中日文化交流史に関する研究は、特に1980年代以降に急増し、その成果も膨大なものとなっている。本稿では検討の便宜上、アヘン戦争が勃発した1840年を境に、清朝初・中期と清朝後期に分け、それぞれの中日文化交流史の研究を紹介する。

（1）清朝初・中期（1644～1840）における中日文化交流史に関する研究

清朝初・中期における中日文化交流史に関する研究については、まずマクロ的・総合的なレベルで行われていることが多い。例えば、明清時代を研究対象とした張昇余の『明清時期中日文化交流研究』³⁴は、明清時代の中日文化交流の背景、明清時代の中日貿易、明清時代の儒学・宗教・書画・医学などにおける中日交流について総合的な研究を行っている。滕軍らによる『中日文化交流史——考察と研究』（原題《中日文化交流史：考察与研究》）の第6章「清朝前期の中日文化交流」では、清国人の長崎貿易、隠元と朱舜水の日本での活躍などを総説した。薛明は『清前期の中日関係研究』³⁵において、長崎、朝鮮、琉球を媒介とした中日関係の研究を通じ、清朝初期には両国政府が民間レベルの長崎貿易を通じて政治、外交に関する間接的な関係を作り、さらに朝鮮や琉球を媒介とした様々な間接的な関

30 同上書、「序文」。

31 北平故宮博物院編《清光緒朝中日交渉史料》、北平故宮博物院、1932年。

32 北平故宮博物院編《清宣統朝中日交渉史料》、北平故宮博物院、1933年。

33 王彦威、王亮輯編、王敬立校《清季外交史料》、湖南师范大学出版社、2015年。

34 張升余《明清時期中日文化交流研究》、陝西人民出版社、2008年。

35 薛明《清前期的中日关系研究》、辽宁大学出版社、2014年。

係も加わることで中日政治・外交関係の全体的な関係が形成されていたと唱えた。

他にも、中日長崎貿易と文化交流、中日漂流民、日本に渡った僧侶や学者についても多くの研究が行われている。

(a) 中日長崎貿易及び文化交流に関する研究

従来この分野に取り組む日本人研究者が多く、その研究成果も多かった。中国の学界における研究は、日本人研究者の研究成果を踏まえたものが多い。

1980年代から1990年代にかけては、徐恭生、魏能涛、任鴻章、林仁川、劉序楓らの研究が注目を集めた。

徐恭生の「鄭氏と日本の貿易関係について」³⁶は、鄭氏が日本を海外貿易の主要対象国とした理由及び対日貿易の歴史とその特徴を論じている。17世紀半ばに鄭氏が経済と貿易において日本と密接な関係を結んだことが、清朝による台湾統一後の海上貿易の発展のため、確固たる基礎を築いたと主張している。

魏能涛の「明清時期の中日長崎商船貿易について」³⁷では、明末清初における中日長崎商船貿易を考察することによって、江戸時代に中国と日本の間に公式関係はなかったが、長崎を窓口として両国の経済交流が維持されていたことが指摘された。

任鴻章の「明末清初における鄭氏勢力と日本貿易」³⁸では、清初の朝廷は外交に関心を持つ余裕がなく、日本の江戸幕府も依然として南明政権を正統視していたことが説明される。「韃靼人」である清朝政府と外交関係を構築することを潔しとしない状況で、「反清復明」を使命とした鄭氏勢力が中日貿易の主役として登場し、半世紀以上にわたって中日関係史に大きな影響を及ぼしたと論じた。任鴻章の著書『近世日本と日中貿易』³⁹は、1988年から1989年にかけて日本で出版された全13巻のシリーズ『東アジアのなかの日本歴史』の1冊である。江戸幕府の鎖国と長崎における中日貿易の背景、長崎の信牌貿易の確立などを体系的に研究し、長崎貿易に対する当時の中国人研究者の研究水準を示した。

林仁川の『明末清初の民間海上貿易』⁴⁰は、明末清初の民間海上貿易が発展した歴史的背景、民間海上貿易集団の形成などをマクロ的に考察した。

劉序楓の「清朝の乍浦港と中日貿易」⁴¹は、長崎貿易で乍浦港から出港していた商船の役割について綿密に考察したものである。

次に、易恵莉の論考を三つ紹介する。まず「清軍入関前後における清朝の中日関係について」⁴²は、北京占領前後の清政権と日本との関係を探る中国の学术界で比較的早い時期の論文である。日本の存在を決して無視しないという政治的伝統が清初にも受け継がれ、近

36 徐恭生《试论郑氏与日本的贸易关系》、《福建师大学报（哲学社会科学版）》、1983年第2期。

37 魏能涛《明清时期中日长崎商船贸易》、《中国史研究》、1986年第2期。

38 任鴻章《明末清初郑氏集团与日本的贸易》、《日本研究》、1988年第4期。

39 任鴻章『近世日本と日中貿易』、六興出版、1988年。

40 林仁川《明末清初私人海上贸易》、华东师范大学出版社、1987年。

41 劉序楓《清代的乍浦港與中日貿易》、張彬村、劉石吉編《中國海洋發展史論文集》第5輯、中央研究院中山人文社會科學研究所、1993年。

42 易恵莉《论入关前后的清与日本关系》、《学术月刊》、2001年第1期。

代まで中日両国が長崎貿易をめぐる一度も対立しなかったことにつながっていると論じている。次の「清康熙後期の政治と中日の長崎貿易」⁴³では、康熙後期の内務部商人による長崎銅貿易に関する研究から、清朝初期の長崎銅貿易の変化はいずれも中国の内政に大きな影響を与えていたという結論を導き出した。最後の「長崎貿易における中国人商人と日本人漢学者」⁴⁴では、頼山陽や大槻磐溪らの著作に含まれる長崎貿易にかかわった中国人商人に関する記録を整理することにより、中国人商人と日本人学者の長崎での交流に焦点を当てて考察した。

孫文の『唐船風説：文献と歴史——『華夷変態』の初歩的考察』⁴⁵では、唐通事の制度化過程、風説書と唐船の関係、及び風説書の内容構造の変遷と作成方式などが考察されている。主に『華夷変態』（林鶯峰編）に収録されている1644年から1728年にかけての風説書2300点余りを文献学的に整理し、風説書や唐船の数・出港地・構成・乗船者の身分などに関する基本的なデータが得られるようになっている。

近年、通商や文化交流に関する著作が相次いで刊行されたことは、この分野における中国学者の研究が大きく進展したことを示している。彭浩の『近世日清通商関係史』⁴⁶では、近世の中日通商の過程における日本の関連制度と組織について具体的な研究が行われた。朱徳蘭の『長崎華商：泰昌号、泰益号貿易史』⁴⁷では、福建出身の商人が創立した商号泰昌号・泰益号に焦点を当て、その商業書簡、帳簿などの研究史料を十分に活用した。二つの大手商号の経営史と長崎貿易に与えた影響について具体的な実証研究が行われた。王来特の『近世中日通商関係史研究』⁴⁸では、1370年代から18世紀半ばまでの中日通商関係を研究対象とする。中日交渉体制、貿易モデルの確立・進化・解体と再構築の過程に加え、政治的問題などを綿密に検討することで、近世東アジアにおける地域秩序の歴史的軌跡と構造的特徴を一側面から描き出そうとした。

唐権の論文「近代日本における江芸閣の人物像の変遷」⁴⁹は、19世紀初頭に渡日し20年にわたって商売を行っていた文人商人の江芸閣に関する論考である。日本人との詩文・書道などでの文化交流、そして近代以降の中日両国の学者による江芸閣に対する賛否両論を詳しく整理し、江芸閣を漢詩文の分野で最も活躍した人物であると結論付けた。

また、この分野に対する中国学界の関心は、日本人研究者の著書翻訳にも現れており、『江戸時代日中秘話』⁵⁰『江戸時代中国典籍流播日本之研究』⁵¹『明清時代東亜海域的文化交

43 易惠莉《清康熙朝后期政治与中日长崎贸易》、《社会科学》、2004年第1期。

44 易惠莉《长崎贸易中的中国商人与日本汉学者》、《档案与史学》、2000年第6期。

45 孫文《唐船風説：文献と歴史——〈華夷変態〉初探》、商务印书馆、2011年。

46 彭浩『近世日清通商関係史』、東京大学出版会、2015年。

47 朱徳蘭《长崎華商：泰昌号、泰益号貿易史（1862-1940）》、厦门大学出版社、2016年。

48 王来特《近世中日通商关系史研究：贸易模式的转换与区域秩序的变动》、清华大学出版社、2018年。

49 唐権《江芸閣形象在近代日本の变迁》、《汉学研究》总第28期、2020年。

50 大庭脩著、徐时虹译《江戸時代日中秘話》、中华书局、1997年。

51 大庭脩著、戚印平等译《江戸時代中国典籍流播日本之研究》、杭州大学出版社、1998年。

流』⁵²『清代帆船与中日文化交流』⁵³『清代海外貿易史研究』⁵⁴『海上絲綢之路与重州海域交流：15世紀末—20世紀初』⁵⁵がある。

(b) 中日漂流民についての研究

劉序楓は漂流民という課題に先駆的に取り組んだ学者の一人で、その主な研究成果に、「清朝の日本人海難民に対する送還から見た清代の中日関係 (1644～1861)」⁵⁶「清朝における日本人海難民の救助と送還の制度形成に関する試論」⁵⁷「清代における環中国海域の海難事件の研究——清日両国間の海難民の救助と送還の制度を中心に (1644～1861)」⁵⁸「清代の公文書と環東アジア海域の海難事件についての研究——海難民送還ネットワークの形成を兼ねて論ず」⁵⁹がある。これらの論文では、中日両国で現存している史料をもとに、両国の漂流民に対する救助・送還体制の形成や漂流民の送還から見る中日関係などの課題に重点を置き、研究が展開された。

王明星は論文「鎖国時代の日本人漂流民の中国観」⁶⁰の中で、一部の漂流民によって残された記録を分析することを通じ、江戸時代における日本人漂流民の中国に対する認識と、それが鎖国時期の日本社会に及ぼした影響を考察した。王宝平は論文「中日漂流民の贈答詩について」⁶¹の中で、『江戸漂流記総集』（日本評論社、1992）、『江戸時代漂着唐船資料集』（関西大学出版部、1991）などの漂流史料に収められている漂流民の贈答詩と唱和詩を紹介した。

米慶余の論文「琉球漂流民事件と日本の台湾進攻 (1871～1874)」⁶²では、1874年の日本の台湾出兵の起因、経過と結果について、琉球漂流民が殺されたことによる日本側の反応、日本軍の台湾出兵と中日間の交渉、日本政府の戦争準備とその企み、和議と「日清両国間互換條款」の成立などの面から具体的に分析を行った。

黄璇璇は「江戸時代における日本文人と中国人漂流民の交流——安永9年日本安房の中

52 松浦章著、郑洁西等译《明清时代东亚海域的文化交流》、江苏人民出版社、2009年。

53 松浦章著、张新艺译《清代帆船与中日文化交流》、上海科学技术文献出版社、2012年。

54 松浦章著、李小林译《清代海外贸易史研究》、天津人民出版社、2016年。

55 松浦章著、孔颖编译《海上丝绸之路与亚洲海域交流（15世纪末-20世纪初）》、大象出版社、2018年。

56 劉序楓《從清朝對日本海難難民的遣返來看清代中日關係 1644-1861》、何石金昌洙教授華甲記念史學論叢編輯委員會編《何石金昌洙教授華甲記念史學論叢》、범우사、1992年。

57 劉序楓《試論清朝對日本海難難民的救助與遣返制度之形成》、浙江大學日本文化研究所編《中日關係史論考》、中華書局、2001年。

58 劉序楓〈清代環中國海域的海難事件研究：以清日兩國間對難民的救助及遣返制度為中心（1644-1861）〉、朱德蘭編《中國海洋發展史論文集》第8輯、中央研究院中山人文社會科學研究所、2002年。

59 劉序楓〈清代檔案與環東亞海域的海難事件研究：兼論海難民遣返網絡的形成〉、《故宮學術季刊》第23卷第3期、2006年。

60 王明星《鎖國時代日本漂民的中国觀》、《日本問題研究》、1988年第3期。

61 王寶平《中日漂流民贈答詩勾沉》、徐靜波、胡令遠主編《東亞文明的共振與環流》、上海社會科學院出版社、1996年。

62 米慶余《琉球漂民事件與日軍入侵台灣（1871-1874）》、《歷史研究》、1999年第1期。

国南京船漂流事件を例に」⁶³で、1780年（安永9）に日本の安房千倉に漂着した中国船「元順号」の乗員たちと日本人儒学者との筆談資料などを通じて、この漂流事件が清朝の中日文化交流における意義、また日本人儒学者の中国観とその形成背景を主に考察した。

孟晓旭が博士論文をもとに完成させた著書『漂流事件と清代の中日関係』⁶⁴は、清朝時代の漂流事件が中日関係に与えた影響について現在の中国で最も体系的かつ包括的に行われた研究であると言えよう。同書では数多くの国内外の資料をもとに、漂流事件と清朝における中日関係への影響を清朝初期（1644～1684）、清朝中期（1685～1870）と清朝後期（1871～1911）の三つの時期に分けて具体的に考察が行われた。漂流事件が中日関係にある程度の影響を与えたと同時に、中日両国間に正式な国交関係がないという状況が両国の漂流事件に対する処理を制約したと論じた。

(c) 清朝初期の訪日学者や僧侶に関する研究

明末から清初にかけて、戦乱を逃れ、または明朝の復興を目指すため、学者、僧侶、医師、画家が来日しており、その中でも浙江省余姚出身の明朝遺臣であった朱舜水（1600～1682、1659年来日）、浙江省余杭出身の著名な学者であった陳元賛（1587～1671、1619年来日）、浙江省浦江出身の高僧であった東皋心越（1639～1694、1676年来日）、福建省福清出身の黄檗山万福寺の住持であった穩元（1592～1673、1654年訪日）、浙江省杭州の出身で、医師として来日し後に黄檗宗の僧籍に入った独立性易（1596～1672、1653年来日）、などが広く知られている。彼らはいずれも中国文化の普及と中日間の文化交流の促進に大きく貢献した。

その中で朱舜水についての研究が最も多い。以下にその主な関連著作をおおよそ年代順に挙げる。

朱謙之が整理した『朱舜水集』⁶⁵と徐興慶編集の『朱舜水集補遺』⁶⁶は、朱舜水研究の基礎史料と言える。張立文などが編集した『中日文化交流の偉大なる使者——朱舜水の研究』⁶⁷は、1997年に上海市松江県と浙江省余姚市政府文化管理委員会が共催した「朱舜水生誕395周年・中日舜水学研究国際学術シンポジウム」の論文集であり、20余篇の関連論文が収録されている。町田三郎・潘富恩が編集した『朱舜水と日本文化』⁶⁸は、2000年に復旦大学で開催された「朱舜水生誕400周年学術シンポジウム」の論文集で、朱舜水の来日による日本文化への影響などに関する20本の論文が収録されている。覃啓勳の著書『朱舜水の東瀛での学問伝授についての研究』⁶⁹は、朱舜水の日本での学問伝授の基礎、対象、内容

63 黄璇璇《江戸时代日本文人和中国漂流民的中日交流：以安永九年日本安房中国南京船漂流事件为例》、四川外国语大学硕士论文、2017年。

64 孟晓旭《漂流事件与清代中日关系》、中国社会科学出版社、2010年。

65 朱舜水著、朱謙之整理《朱舜水集》（上下册）、中华书局、1981年。

66 徐興慶編注《朱舜水集補遺》、學生書局、1992年。

67 張立文、町田三郎主编《中日文化交流的伟大使者：朱舜水研究》、人民出版社、1998年。

68 町田三郎、潘富恩主编《朱舜水与日本文化》、人民出版社、2003年。

69 覃啓勳《朱舜水东瀛授业研究》、人民出版社、2005年。

などについて考察したものである。銭明の『勝国賓師——朱舜水伝』⁷⁰は、「出身・経歴・学風・学徳」「古徳の提唱・教学の確立」「情義の深さ・親友への思いやり」「逸話・声名」という4部から構成され、朱舜水の非凡な人生と中日文化交流への貢献について詳しく紹介している。林和生・李心純の『朱舜水と徳川光圀——日本における儒学の伝播及びその影響』⁷¹では、朱舜水と徳川光圀の関係、朱舜水とその弟子たちの日本儒教への貢献について詳述されている。徐興慶編集の『朱舜水と近世日本における儒教の発展』⁷²は、2010年に台湾大学などが主催した「朱舜水と東アジア文明の発展」をテーマとした国際学術シンポジウムの論文集であり、国内外の研究者による論文15本を収録している。

徐興慶主編の『日本徳川博物館蔵品録Ⅰ 朱舜水文献釈解』⁷³では、朱舜水の手跡も含める日本徳川博物館所蔵の関連資料について解説し、前書きの部分では朱舜水の在日活動などについて論じられている。この本は『日本徳川博物館蔵品録』シリーズの1冊で、『日本徳川博物館蔵品録Ⅱ 徳川光圀文献釈解』と『日本徳川博物館蔵品録Ⅲ 水戸藩内外関係文献釈解』もそれぞれ2014年と2015年に上海古籍出版社から出版されている。

李甦平は著書『朱舜水』⁷⁴で、「一代鴻儒」「舜水学」「舜水事功学」「舜水歴史学」「舜水経世学」「舜水教育学」「舜水学の日本社会思想への影響」「歴史の記録」の8部に分け朱舜水の学術思想を紹介した。

史可非は博士論文「清初に東渡した明の遺民についての研究」⁷⁵で、清初に日本に渡った明の遺民である朱舜水、陳元賛、隠元などの人物を研究対象とした。史料の整理と解説に基づき、明清時代の中日関係の変化と清初の満漢異質文化の融合という背景の下に、これらの人物が中日文化交流にどのような役割を果たし、歴史的な影響を残したかなどについて研究を行った。

周逢年は博士論文「朱舜水思想の日本における伝播についての研究」⁷⁶で、朱舜水思想の特徴、朱舜水思想の日本における伝播方式・伝播対象・伝播効果などについて詳しく研究を行っている。朱舜水の思想が日本で受け入れられたのは、彼の「実理実学」の思想が当時の日本社会に適し、その気高い品格と気骨が日本の弟子と民衆に尊ばれ、さらに徳川光圀も彼の言行を信頼し、その思想を高く評価したからであると論じた。

朱舜水以外の関連人物については、衷爾鉅が編集した『陳元賛集』⁷⁷、陳智超が編集した『渡日した高僧東臯心越の詩文集』⁷⁸、浦江县政治協商委員会文史資料委員会が編集した『東臯心越全集』⁷⁹、陳智超らが編集した『渡日した高僧隠元の中国国内関係者との往来書簡集

70 銭明《勝国賓師：朱舜水伝》、浙江人民出版社、2008年。

71 林和生、李心純編著《朱舜水与徳川光圀：儒学在日本的传播及其影响》、山西教育出版社、2012年。

72 徐興慶編《朱舜水與近世日本儒學的發展》、國立臺灣大學出版中心、2012年。

73 徳川真木監修、徐興慶主編《日本徳川博物館蔵品録Ⅰ 朱舜水文献釈解》、上海古籍出版社、2013年。

74 李甦平《朱舜水》、陝西师范大学出版总社、2017年。

75 史可非《清初东渡明遗民研究》、中央民族大学博士论文、2012年。

76 周逢年《朱舜水思想在日传播研究》、浙江大学博士论文、2017年。

77 陳元賛著、衷爾鉅輯注《陳元賛集》、辽宁人民出版社、1994年。

78 東臯心越著、陳智超編纂《旅日高僧東臯心越詩文集》、中國社會科學出版社、1994年。

79 浦江县政协文史資料委員会編《東臯心越全集》、浙江人民出版社、2006年。

——日本黄檗山萬福寺藏⁸⁰、徐興慶が編集した『天閑老人——独立性易全集』⁸¹などの史料集がある。関連の研究著作には、林観潮の『隠元隆琦禅師』⁸²、周如漢の『余杭奇人陳元賛』⁸³があり、前者は隠元隆琦禅師の東渡の事蹟とその思想を詳しく記述し、後者は陳元賛の在日活動の軌跡を詳しく考証したうえ、国内外の関連研究の成果を収録したものである。

その他、杭州市余杭区社会科学連盟などは2019年に「陳元賛赴日400周年及び余杭歴史伝奇人物陳元賛學術思想シンポジウム」⁸⁴を開催し、国内外から50余名の研究者が参会した。

(2) 清代後期(1840～1911)における中日文化交流史に関する研究

清代後期の中日文化交流は豊富かつ多彩で、中日両国の社会変革と近代化事業に大きな影響をもたらした。以下、清代後期の約七十年間を、中日修好条規が締結された1871年と、甲午戦争が終結した1895年を境に三つの時期に分けて、それぞれの時期についての研究を紹介する。

(a) 日本の「開国」「維新」と中国の情報(1840～1871)

アヘン戦争から中日修好条規が締結された1871年までが、近代中日文化交流の第一期である。この時期において、中国人は西洋列強の侵略を契機に世界に目を向けた。一方、日本ではペリーの黒船来航で鎖国時代が終わり、それから十数年を経て260年余り続いた徳川幕府が倒れ、明治新政府が樹立された。時期から見れば、近代中国と西洋との危機的關係は日本より十数年も早く、その間に中国で起こった様々な変化は、日本の西洋列強に対する恐怖感を強めた。この事態は日本の開国と西洋化への大きな原動力となった。この過程で、中国からのアヘン戦争の情報、中国が日本より先に習得した西洋の知識、中国国内状況の最新情報などが、具体的にどのように日本に伝わったか、そしてそれが日本の開国と維新にどんな影響を与えたかなどについて、中国の研究者も数多く研究を行った。

アヘン戦争と太平天国の乱が日本に与えた影響に関する研究

アヘン戦争と太平天国の乱は19世紀中期に中国で起きた最も重要な歴史的イベントであり、近代中国社会に深刻な影響を与え、日本の開国と維新にも大きく影響した。アヘン戦争と太平天国の乱の情報が日本に伝わるルート、日本人の反応、また、当時の日本社会に与えた多大な影響について、王曉秋の「太平天国革命の日本に対する影響」⁸⁵、「日本におけるア

80 陳智超等編《旅日高僧隱元中土來往書信集：日本黄檗山萬福寺藏》、中華全國圖書館文獻縮微複製中心、1995年。

81 徐興慶編著《天閑老人：獨立性易全集》、國立臺灣大學出版中心、2015年。

82 林観潮《隠元隆琦禅師》、厦門大學出版社、2010年。

83 周如漢編著《余杭奇人陳元賛》、浙江古籍出版社、2018年。

84 原題は「紀念陳元賛赴日傳播中華文化400周年暨余杭歷史傳奇人物陳元賛學術思想研討會」である。

85 王曉秋《太平天国革命對日本的影响》、《歷史研究》、1981年第2期。

ヘン戦争の反響」⁸⁶、「アヘン戦争の日本に対する影響」⁸⁷などの論文は、中国国内で比較的早い時期に発表された研究成果である。中国のアヘン戦争敗北は「前車の覆轍」に喩えられ、それが日本にとって「後車の戒め」になったと考えられた。王晓秋は上記の論文で、アヘン戦争の情報が日本に伝わった方法、アヘン戦争を記述した日本の著作、日本人のアヘン戦争に対する認識、魏源の『海国図志』が日本に与えた影響について詳しく論説した。それにより日本の有識者が中国のアヘン戦争の教訓を得て、積極的に西洋に学び、制度を改革し、そのため、開国・倒幕・維新が推進され、日本の近代化につながったと結論付けた。また、太平天国の乱の情報が日本に伝わると、日本社会の各階層に影響を与え、特に変革を求める維新志士たちが強く刺激された。彼らは日本社会の現実に照らし中国の太平天国の乱の教訓を分析して、日本が維新改革を断行しなければならないと思ひ、最終的に日本の明治維新運動を促進したとしている。

そのほかの関連論文として、容应英の「『海国図志』と日本の明治維新」⁸⁸、劉勇の「十九世紀五六十年代における『海国図志』の日本での伝播と影響」⁸⁹、崔崑崙の「アヘン戦争時期の日本士人の中国観」⁹⁰、李文明の「『海国図志』の日本に対する影響」⁹¹、薛奇慧の「幕末における日本の太平天国に対する認識——民間の読み物を中心に」⁹²があり、それぞれ異なる視点から有益な研究を行っている。

千歳丸と中日文化交流に関する研究

1862年に日本から上海へ派遣された千歳丸は、徳川幕府が鎖国政策を実施して以来、初めての中国派遣貿易官船である。その狙いは商売よりも中国の現状を観察することにあつた。これに対し、馮天瑜は「千歳丸の上海来航——幕末日本の中国視察」⁹³、「千歳丸——日本鎖国二百年後来航した第一船」⁹⁴などの論文を著した上で、『千歳丸』の上海来航——日本人の一八六二年の中国視察」⁹⁵を出版している。同著書では、商船の乗員が残した日記などの史料を読み解くことを通じ、乗員の上海での見聞や思考、言動について体系的に考察を行っている。また、千歳丸の乗員である納富久次郎、日比野輝寛、名倉予何人、高杉晋作らによる上海見聞録も付録として収録されている。

王勇・謝詠共著の『名倉予何人筆談文献の研究』⁹⁶では、「千歳丸」の乗員である名倉予何人が中国滞在中に著した筆談文集『滬城筆話』と『航海漫録』を対象として注釈と初歩

86 王晓秋《鸦片战争在日本的反响》、《近代史研究》、1986年第3期。

87 王晓秋《鸦片战争对日本的影响》、《世界历史》、1990年第5期。

88 容应英《〈海国图志〉与日本明治维新》、《船山学刊》、1994年第2期。

89 刘勇《十九世纪五六十年代〈海国图志〉在日本的传播和影响研究》、重庆大学硕士论文、2011年。

90 崔昆仑《试析鸦片战争时期日本士人的中国观》、《甘肃社会科学》、2011年第2期。

91 李文明《〈海国图志〉对日本影响新辨》、《东北亚学刊》、2017年第6期。

92 薛奇慧《幕末日本的太平天国认识：以民间的读物小说为中心》、北京外国语大学硕士论文、2017年。

93 冯天瑜《“千岁丸”上海行：日本幕末的中国观察》、《人文论丛》、1999年10月。

94 冯天瑜《“千岁丸”：日本锁国二百年后使清第一船》、《清史研究》、2000年第3期。

95 冯天瑜《“千岁丸”上海行：日本人一八六二年的中国观察》、商务印书馆、2001年。

96 王勇、謝詠《名倉予何人筆談文献研究》、上海交通大學出版社、2018年。

的な解説を通じ、中国訪問の背景や経緯、近代における中国での日本人のイメージの変遷を考察した。また、趙倩の「1862年の千歳丸乗員の中国に対する視察」⁹⁷、謝詠の「名倉予何人筆談史料の初歩的な研究——『滬城筆話』と『滬城筆話拾遺』を例に」⁹⁸、黄哲の「幕末日本人の上海来航の所感——千歳丸乗員の記録を中心に」⁹⁹の修士論文もある。

日本における中国書籍の影響に関する研究

アヘン戦争後、中国で出版された世界地理や政治・法律、科学技術などの各種の書籍が日本へ流入し、日本人の西洋に対する認識の変化に大きな影響を与えたとされている。王晓秋の『近代中日文化交流史』¹⁰⁰は、先に出版した『近代中日啓示録』¹⁰¹、『中日文化交流史話』¹⁰²などの著書をもとに内容を拡大して完成させたものであり、30年経った現在でも、最も体系的かつ包括的な著作である。同書の「漢籍の東漸」の章においては、中国で出版された書籍が日本に流布し、近代日本の西洋認識、開国と維新などに大きな影響を与えたことを指摘している。なお、『海国図誌』が日本に与えた影響に関する研究は、君羊の「『海国図誌』と日本の明治維新運動」¹⁰³、李存朴「魏源の『海国図誌』と日本の『海国図誌』時代」¹⁰⁴、張曉剛らの「『海国図誌』と日本の世界認識」¹⁰⁵、郝玉松の「『海国図誌』の重要思想及び日本社会に対する影響」¹⁰⁶がある。その他の書籍についての研究は主に、範凡の「晚清中国における「西学」の日本に対する影響——『瀛環志略』を例に」¹⁰⁷、陳秀武の「『万国公法』の明治初期の日本に対する影響」¹⁰⁸、「近代日本における『万国公法』の諸版本についての考察」¹⁰⁹、「日本幕末期における『万国公法』の受容」¹¹⁰、咏梅らの「『格物入門』の日本における流布」¹¹¹、鄒振環の「丁韪良訳述『万国公法』の中・日・韓における伝播の比較研究」¹¹²の論文がある。

97 趙倩《1862年“千岁丸”使团对中国的观察》、辽宁大学硕士论文、2015年。

98 謝詠《名倉予何人筆談史料初探：以〈滬城筆話〉及〈滬城筆話拾遺〉為例》、浙江工商大学硕士论文、2017年。

99 黃哲《幕末日本人的上海行游观感：以“千岁丸”使团成员游记为中心》、东北师范大学硕士论文、2018年。

100 王晓秋《近代中日文化交流史》、中华书局、1992年。

101 王晓秋《近代中日启示录》、北京出版社、1987年。

102 王晓秋《中日文化交流史话》、山东教育出版社、1991年。

103 君羊《〈海国图志〉与日本的明治维新运动》、《衡阳师专学报》、1992年第5期。

104 李存朴《魏源的〈海国图志〉与日本的〈海国图志〉时代》、《安徽史学》、2002年第2期。

105 張曉剛、國宇《〈海国图志〉与日本世界观念的重构》、《北华大学学报（社会科学版）》、2010年第5期。

106 郝玉松《〈海国图志〉的重要思想及其对日本社会的影响》、《邵阳学院学报（社会科学版）》、2011年第4期。

107 範凡《晚清中国“西学”对日本的影响：以〈瀛环志略〉为例》、《文学界（理论版）》、2011年第12期。

108 陳秀武《〈万国公法〉在明治初期的日本》、《东北师大学报（哲学社会科学版）》、2009年第2期。

109 陳秀武《近代日本多版本〈万国公法〉考察》、《东北师大学报（哲学社会科学版）》、2012年第3期。

110 陳秀武《日本幕末期的“万国公法”受容》、《东北师大学报（哲学社会科学版）》、2013年第4期。

111 咏梅、冯立昇《〈格物入门〉在日本的流布》、《西北大学学报（自然科学版）》、2013年第1期。

112 鄒振環《丁韪良译述〈万国公法〉在中日韩传播的比较研究》、《韩国研究论丛》第7辑、2000年。

(b) 中日修好条規の枠組みにおける中日文化交流に関する研究（1871～1895）

1871年の中日修好条規の締結から、甲午戦争での中国の敗戦により同条規が廃止されるまでの二十余年は、近代における中日文化交流の第二期である。中日修好条規の締結は、両国が国交を正式に樹立したことを示している。両国の文化交流の主体は拡大し、それまで長崎に限定されていた在日中国人の活動が日本各地の開港場に広がり、両国がお互いに公使館と領事館を開設したことで外交使節が往来した。日本が通訳・翻訳者を養成するなどの目的で中国へ留学生を派遣し、また中国も同じ目的で駐日公使館内に東文学堂を設け中国から学生を招来して日本語を学習させた。さらに文人や学者など両国の民間人による交流も盛んに行われた。

以下、主に中日修好条規の締結交渉における文化交流、両国の外交使節及び民間人往来による文化交流、中国に派遣された日本人留学生及び東文学堂の学生に関する文化交流、という三つの面の研究を紹介する。

中日修好条規の締結交渉における文化交流に関する研究

中日両国は中日修好条規締結にあたり、1870年8月の予備交渉から、1871年の条規の締結、1873年4月の条規正式文書の交換まで4年も要した。1873年4月の条規正式文書の交換が行われた後、李鴻章は日本側の使節として派遣された副島種臣を「明達大体、毫無矯強、尚属可嘉」¹¹³（物事の要点をわきまえ、少しも過激な言動がなく、やはり褒め称えるべきである）と称賛し、さらに「忠勤亮時」¹¹⁴という自筆の扁額を贈呈した。ここから分かるように清朝時代の中日友好関係はこの時に頂点に達した。

この条規の締結過程で、関係者は様々な交流をしていた。贈り物のやり取りは条規締結交渉過程において行われていた文化交流の一つである。両国とも贈答の儀礼を重視する国だったので、条規交渉の過程で土産を贈呈し合い、その後、日本の使節が国家の礼儀として中国の皇帝と皇太后に品物を贈り、中国側も日本の天皇と皇后に返礼品を贈った。両国の関係者が贈った物の内容、数量、特徴などについて考察を行った論文は、拙稿の「「中日修好条規」の締結過程における贈答品について」¹¹⁵、郭巧君の「近代中日外交における贈答儀礼——「中日修好条規」の締結過程を中心に」¹¹⁶がある。

王魁喜の「近代中日関係の始まり——1871年の「中日修好条規」について」¹¹⁷は、中国国内で比較的早い時期に条規の性質及び特徴について分析した論文である。李啓彰の「近

113 李鴻章《李鴻章全集 第二冊：奏稿（一八七〇年～一八八〇年）》卷二十一、海南出版社、1997年、745頁。

114 外務省編纂『大日本外交文書』第6巻、日本國際協會、1939年、197頁。扁額の題字は「奉贈副島尊兄星使大人 忠勤亮時 同治癸酉六月 友弟李鴻章題」となっている。

115 呂順長《中日締結〈修好條規〉時的禮物往還》、《歷代正史日本傳考注・清代卷》、上海交通大學出版社、2016年。

116 郭巧君《近代中日外交之禮物往來：以〈中日修好條規〉締結過程為中心》、浙江工商大學碩士論文、2017年。

117 王魁喜《近代中日關係的開端：從一八七一年〈中日修好條規〉談起》、《東北師大學報（哲學社會科學版）》、1981年第1期。

代中日関係の起点——1870年中日条規の締結交渉過程についての検討¹¹⁸は、修好条規の締結交渉過程について系統的に論述したもので、廖敏淑の「中日修好条規」と甲午戦争——修好条規交渉を中心に¹¹⁹は、「条規」締結後の改定交渉の過程について考察を行い、甲午戦争勃発との関連を検討したものである。以上の論文はいずれも交渉過程における両国の文化交流について触れている。

またその他の論文として、米慶余らの「1871年の中日条規締結についての分析」¹²⁰、韓東育の「日本における宗藩体系解体の設計と虚実進路——「中日修好条規」の再認識」¹²¹、白春岩の「マリア・ルス号事件と「中日修好条規」」¹²²などがある。

中日両国における外交使節及び民間人による文化交流に関する研究

1871年の中日修好条規の締結により、日本政府は1874年に中国駐在公使館を設立し、中国清朝政府も1877年に何如璋を公使とする駐日使節団を派遣した。その後、外交使節のみならず、官僚・文人墨客・商人・旅人など人的往来が頻繁になり、文化交流が盛んに行われた。

王晓秋は、初代駐日使節団の文化交流活動、中国人の日本視察旅行記と日本研究著作、文人墨客の相互訪問と交流、中日詩文交流の美談、来日中国人による日本書籍、特に中国版漢籍の購読、中国の維新改革と日本の経験について、前掲の『近代中日文化交流史』の中で詳細な考察を行い、さらにその後出版した『中日関係史研究』¹²³、『近代中国と日本——交流と相互影響』¹²⁴、『史海遊遊録』¹²⁵などの著書でも詳しく論述している。

王宝平は著書『清代中日学术交流の研究』¹²⁶の中で、明治初期から中期にかけての駐日中国外交官及び在日民間文人による文化活動について考察し、この時期における主な中日文化交流活動をまとめた。日本政治の「脱亜入欧」は早くも幕末と明治初期に行われていたが、甲午戦争後に完成したと結論付けた。また同書では、黄遵憲の『日本国志』（1887）、傅雲龍の『遊歴日本図経』（1889）、姚文棟の『日本国志』（1884）、黄肇鉉の『日本環海險要図志』（写本、作成年未詳）、王惕斎の『独臂翁聞見随録』（刊行年未詳）、葉慶頤の『策鰲雜摭』（1889）など清末中国人の日本研究著作についても詳細な考察を行い、黄遵憲の『日本国志』の版本やその中に収載された資料の出所などに対して新たな見解を示している。そのほか、王宝平が整理した『晚清中国人日本視察記集成——教育視察記』¹²⁷、『晚清東遊日記

118 李启彰《近代中日關係的起點：1870年中日締約交涉的檢討》、《近代史研究所集刊》第72期、2011年。

119 廖敏淑《〈中日修好条規〉与甲午战争：以修约交涉为中心》、《抗日战争研究》、2014年第4期。

120 米庆余、薛敬文《一八七一年中日立约分析》、《历史档案》、1982年第4期。

121 韩东育《日本拆解“宗藩体系”的整体设计与虚实进路：对〈中日修好条規〉的再认识》、《近代史研究》、2016年第6期。

122 白春岩《马利亚·老士号事件与〈中日修好条規〉》、《暨南学报（哲学社会科学版）》、2013年第5期。

123 王晓秋《近代中日关系史研究》、中国社会科学出版社、1997年。

124 王晓秋《近代中国与日本：互动与影响》、昆仑出版社、2005年。

125 王晓秋《史海遊遊录》、中国文史出版社、2018年。

126 王宝平『清代中日学术交流の研究』、汲古書院、2005年。

127 王寶平編《晚清中國人日本考察記集成：教育考察記》（上下冊）、杭州大學出版社、1999年。

彙編』¹²⁸、『日本典籍清人序跋集』¹²⁹、『日本藏晚清中日朝筆談資料——大河内文書』¹³⁰もある。

劉雨珍が編纂した『清代初代駐日公使館員筆談資料彙編』（上下巻）¹³¹は、日本国内に所蔵されている初代駐日公使館員と大河内輝声、宮島誠一郎、石川鴻斎、岡千仞、増田貢ほかの筆談記録を整理したものである。さらにその所蔵状況及び歴史的価値、関連人物を詳しく紹介し、中国学術界による日本蔵の近代中日筆談資料に関する研究の展開に先導的な役割を果たした。また同氏による『中日文学と文化交流史の研究』¹³²では、二十年余りの間に発表した20本の論文と書評が5編に分けて収録されている。そのうち、第3編から第5編は、筆談資料の『大河内文書』の文化史的意義、『宮島誠一郎文書』における琉球交渉史料、黄遵憲の『日本雜事詩』や『日本国志』などの著作の編纂及び影響、黄遵憲と日本人学者との交友について詳論したものである。

清末の駐日公使の中には近代の中日文化交流に重要な貢献をした人物が多く、最も目立つのは、初代駐日使節団の参贊官を務め、『日本国志』という不朽の著作を残した黄遵憲である。黄遵憲に関する研究論文や著作は数多くあるが、その中で最も重要なのは王曉秋と陳応年の編集による『黄遵憲と近代の中日文化交流』¹³³である。これは2001年8月に北京市中日文化交流史研究会が主催した「黄遵憲と中日文化交流」をテーマとした国際シンポジウムの論文集であり、王曉秋、劉徳有など国内外の24名の研究者の論文を収録し、外交、文学、歴史など様々な視点から、黄遵憲と日本の関係について論じられている。

この時期に両国間を行き来した文人墨客についての研究は主に、1876年に中国を訪問し、『棧雲峽雨日記』を著した文人外交官の竹添進一郎、明治初期に来日した浙江省慈溪県出身の王惕齋と王治本、1879年に『扶桑遊記』を著した王韜、1884年に中国に遊歴した岡千仞などの人物に集中している。これらの人物については、前掲の王曉秋の『近代中日文化交流史』に詳しい研究があるほか、この20年の主な研究成果を挙げると、拙稿の「慈溪県出身の王氏兄弟と日本文人」¹³⁴、馮歳平の「竹添井井とその『棧雲峽雨日記』」¹³⁵、恵科らの「近代日本外交官と中国漢学家の重慶に対する認識——竹添井井の『棧雲峽雨日記並詩草』を中心に」¹³⁶、王宝平の「清末に東渡した文人王治本による序跋について」¹³⁷、王玉祥の「晚清の王治本と中日文化交流」¹³⁸、王宝平の「明治前期に来日した浙江商人王惕齋について」¹³⁹、

128 王宝平主编《晚清东游日记汇编》、上海古籍出版社、2004年。

129 王宝平编著《日本典籍清人序跋集》、上海辞书出版社、2010年。

130 王寶平主編《日本藏晚清中日朝筆談資料：大河内文書》（全八冊）、浙江古籍出版社、2016年。

131 劉雨珍編校《清代首屆駐日公使館員筆談資料彙編》（上下冊）、天津人民出版社、2010年。

132 劉雨珍《中日文学与文化交流史研究》、江苏人民出版社、2019年。

133 王曉秋、陳應年主編《黃遵憲與近代中日文化交流》、遼寧師範大學出版社、2007年。

134 呂順長《慈溪王氏兄弟與日本文人》、《浙江方志》、2002年第3期。

135 馮歳平《竹添井井及其〈棧雲峽雨日記〉》、《成都大學學報（社會科學版）》、2003年第4期。

136 恵科、周勇《近代日本外交官和漢学家的重慶認知：以竹添井井〈棧雲峽雨日記并詩草〉為中心》、《東疆學刊》、2019年第1期。

137 王宝平《清季東渡文人王治本序跋輯存》、《文獻》、2009年第4期。

138 王玉祥《晚清王治本與中日文化交流》、《寧波通訊》、2010年第10期。

139 王宝平《明治前期赴日浙商王惕齋之研究》、《浙江工商大學學報》、2012年第2期。

王勤謨の『近代中日文化交流の先駆者としての王愴齋』¹⁴⁰、易恵莉の「日本漢学家の岡千仞と王韜——1860～1870年代の中日知識人の交流をめぐって」¹⁴¹、張雨樂の「王韜と明治時代の漢詩について」¹⁴²、潘徳宝の「王韜の『扶桑遊記』における日本の治遊について」¹⁴³、易恵莉の「中日知識人の交流実録——岡千仞と上海書院の学生との筆談」¹⁴⁴、胡天舒の「岡千仞の中国観——『観光紀遊』を中心に」¹⁴⁵など数多くある。

この時期の中日関係についての研究に、次のような論著がある。戴東陽の『清末の駐日使団と甲午戦争前の中日関係（1876～1894）』¹⁴⁶は甲午戦争前に駐日公使館から見た琉球問題、朝鮮問題及び条約改正などの問題に対する研究で、史料の解説と分析を踏まえ、新たな見解が多く出されている。徐磊の「甲午戦争前における駐日使節団の情報収集が失敗した原因についての分析」¹⁴⁷は、清政権の対外情報システムの遅れと使節団の不合理的な人員配置が対日情報収集に失敗した原因であると結論付けている。孔祥吉の「初代駐日公使何如璋についての再論考」¹⁴⁸では、何如璋が公使在任中、文友として日本の官僚や民間人と広く交際したこと、琉球事件で全力で日本と交渉して国益と国家の尊厳を守ったこと、朝鮮の朝野に広範かつ積極的な影響を与えたことが記される。日本外交史料館の新史料の発見により、彼が清仏戦争勃発の前に日本に情報を提供したことがわかり、その功績に対して再評価する余地があるとも論じている。

日本人中国留学生と駐日公使館内東文学堂の学生に関する研究

明治政府は1871年に成富清風、福島九成など7名の留学生を中国に派遣する。これが近代日本の中国への官費留学生派遣の始まりとなった。その後、外務省や文部省などが相次いで中国に留学生を派遣し、大正・昭和時代まで続いた。

近代日本の中国留学生派遣については、まず桑兵の論文「近代日本人中国留学生」¹⁴⁹が挙げられる。その目的を、地理兵制調査などのスパイ活動、中国の学術文化の学習、翻訳者の育成という3種類に分けたうえで、20世紀に入ってから、日本の東洋主義の復興と新興中国学の発展に伴い、様々な助成金を受ける形で派遣された「学問研究の留学生」が主導的な役割を果たしたことを指摘した。

近年、孫偉珍の「明治政府の派遣による中国留学生の始まり」¹⁵⁰などの論文もあるが、こ

140 王勤謨編《近代中日文化交流先行者王愴齋》、宁波出版社、2011年。

141 易恵莉《日本汉学家冈千仞与王韜：兼论1860～1870年代中日知识界的交流》、《近代中国》第12辑、2002年。

142 張雨樂《王韜与日本明治汉诗研究》、浙江师范大学硕士论文、2018年。

143 潘徳宝《王韜〈扶桑遊記〉与日本治遊空間的建构》、《浙江师范大学学报（社会科学版）》、2018年第3期。

144 易恵莉《中日知识界交流实录：冈千仞与上海书院士子的笔话》、《档案与史学》、2002年第6期。

145 胡天舒《冈千仞的中国观：以〈观光紀遊〉为中心》、《历史教学问题》、2018年第1期。

146 戴東陽《晚清駐日使団与甲午战前的中日关系（1876～1894）》、社会科学文献出版社、2012年。

147 徐磊《甲午战前駐日使団情報収集失敗原因探析》、《日语学习与研究》、2015年第5期。

148 孔祥吉《首任駐日公使何如璋新论》、《广东社会科学》、2004年第3期。

149 桑兵《近代日本留華學生》、《近代史研究》、1999年第3期。

150 孫偉珍《日本明治政府官派留華學生之嚆矢》、北京大学日本研究中心編《日本學》第17輯、2012年。

の問題に対して最も総合的な研究を行ったのは譚皓の『近代日本官費中国留学史（1871～1931）』¹⁵¹である。同書は「日本参謀本部初の清国語学生について」¹⁵²、「近代日本外務省の中国留学生派遣の制度（1871～1931）」¹⁵³などの論文をもとに、さらに内容を拡充して完成させたものである。近代日本の官費中国留学生派遣の背景、官費留学生派遣の始まり、官費留学の発展、19世紀と20世紀の変わり目における新たな動向、中国侵略戦争前の中国留学生派遣という五つの観点から、近代日本における中国留学制度の歴史的な脈絡を整理し、関連人物や史事について客観的に評価した。

一方、中国においても1882年から駐日公使館の中に東文学堂が設けられ、日本語の翻訳人材を養成するために中国国内から学生を選抜して入学させていた。この東文学堂及びその学生について、王宝平は論文「近代中国日本語翻訳の濫觴——東文学堂についての一考察」¹⁵⁴で、学堂の教員と学生、学堂の特徴等の基本事項を体系的に整理したうえで、近代中国人の日本留学の発端が1882年に設立された東文学堂に遡ることができると主張した。汪帥東は「駐日公使館東文学堂についての一考察」¹⁵⁵で、東文学堂により甲午戦争前の日本語翻訳人材不足の問題が解決されたわけではなかったが、その設立が日本語翻訳人材養成の発端となり、後の人材養成に参考となるモデルパターンを提供したと主張した。

(c) かつてない日本ブーム時期の中日文化交流に関する研究（1895～1911）

甲午戦争終結から清朝が滅ぶまでの期間が、近代中日文化交流の第三期である。この時期において、中国は敗戦の反省から日本を通じて西洋の近代的な科学技術を取り入れようとし、留学生と視察員の派遣、日本人教師と顧問の雇用、日本書籍の翻訳など、様々な形で日本に学び、日本ブームが起きていた。日本は中国が伝統から近代へ向かう過程の中で、架け橋として重要な役割を果たしたと言えよう。

中国人日本留学生に関する研究

清末における中日交流の中で影響が最も大きかったのは中国人日本留学生であった。その歴史的起源と発展、留学生の学習と生活の状況、在日活動、近代中国の各分野への影響については数えきれないほど多くの研究成果が出されている。

留学生について早い時期に出された研究成果は本稿で既に紹介した舒新城の『近代中国留学史』である。黄福慶の『清末留日学生』¹⁵⁶は、中国人日本留学の時代背景、留学政策の確立、学習と生活の環境、文化活動、政治活動などについて論じたもので、実藤恵秀の『中国人日本留学史』¹⁵⁷をもとに研究を深化させたものである。尚小明の『留日学生と清末新

151 譚皓《近代日本对华官派留学史（1871-1931）》、社会科学文献出版社、2018年。

152 譚皓《日本参謀本部首批“清国語学生”考略》、《北京社会科学》、2014年第6期。

153 譚皓《试论近代日本外务省对华派遣留学生制度（1871-1931）》、《抗日战争研究》、2017年第2期。

154 王宝平《近代中国日语翻译之滥觞：东文学堂考》、《日语学习与研究》、2014年第2期。

155 汪帥東《驻日使领馆东文学堂考探》、《东北亚外语研究》、2015年第4期。

156 黄福慶《清末留日學生》、中央研究院近代史研究所、1975年。

157 実藤恵秀『中国人日本留学史』（増補版）、くろしお出版、1970年。

政』¹⁵⁸は、清末の予備立憲、教育改革、新軍の訓練、法律制度の改革などの面から日本留学生の清末の「新政」に対する貢献を論じた。

孫石月の『中国近代女子留学史』¹⁵⁹は、近代中国の女子海外留学史全体を取り上げたものであり、その中の「清末における女子学生の日本留学」では、女子留学生の教育に深く関わった青山実践女学校、女子留学生による学生団体や雑誌の創設、革命活動への参加について紹介した。周一川の『近代中国女性日本留学史』¹⁶⁰では、中華民国時代の女子留学生の研究に重点を置いている。併せて下田歌子の中国人女子留学生教育、1903年に起きた「拒俄運動」（反ロシア運動）と1905年に起きた「清国留学生取締規則」の中での女子留学生の行動、清末女子留学生の人数など、清末の留学生についても具体的な研究を行っている。

嚴安生の『日本留学精神史——近代中国知識人の軌跡』¹⁶¹は、中国人日本留学生に関する中国人研究者の日本語による著作であり、出版後国内外から高く評価され、1992年に第19回「大仏次郎賞」と第4回「アジア太平洋賞」（共に朝日新聞社）を受賞している。その後中国語にも翻訳された¹⁶²。本書は、留学生と「中体西用」（中国の伝統的学術を体〈根本〉とし、西洋の近代的学術を用〈応用〉とすること）、留学生の日本体験とその認識について、多くの事例を通じて詳細な考察を行い、東アジアの歴史変動の中にあって彼らは日本でどういう精神世界を持っていたかを明らかにしようとした。

21世紀に入ってから、中国人日本留学生史の研究は次第に細分化した。そのなかで、留学生の出身地や特定の地域に焦点を当てた研究が重視され、多くの研究成果が上がった。拙著の『清末の浙江と日本』¹⁶³では、清末における浙江省出身の初期日本留学生、「五校特約」留学と浙江省の対応、浙江省出身留学生の省内各地における分布、日本での留学体験と帰国後の活動などの面から、清末における浙江省出身の日本留学生を対象として具体的な研究を行った。黄尊嚴らの「清末における山東省日本留学生についての考察」¹⁶⁴、岳程楠の「日本留学生と清末四川省の教育近代化」¹⁶⁵、周立英の『清末の日本留学生と近代の雲南社会』¹⁶⁶、梁中美の『清末民国時期の貴州省の日本留学生と貴州省の近代化』¹⁶⁷、樊国福の『近代日本留学生と直隸省の教育近代化についての研究』¹⁶⁸、洪亮の「清末福建省の日本留学生についての研究」¹⁶⁹、江盈盈の「清末における福建省の留日教育の動機、歷程と学生ダ

158 尚小明《留日学生与清末新政》、江西教育出版社、2003年。

159 孫石月《中国近代女子留学史》、中国和平出版社、1995年。

160 周一川《近代中国女性日本留学史（1872～1945年）》、社会科学文献出版社、2007年。

161 嚴安生『日本留学精神史：近代中国知識人の軌跡』、岩波書店、1991年。

162 嚴安生著、陈言译《灵台无计逃神矢：近代中国人留日精神史》、生活·读书·新知三联书店、2018年。

163 呂順長《清末浙江与日本》、上海古籍出版社、2001年。

164 黄尊嚴、徐志民《清末山东留日学生考释》、《东岳论丛》、2004年第2期。

165 岳程楠《留日学生与清末四川教育近代化》、《日本问题研究》、2009年第4期。

166 周立英《晚清留日学生与近代云南社会》、云南大学出版社、2011年。

167 梁中美《晚清民国时期贵州留日学生与贵州近代化》、西南交通大学、2014年。

168 樊国福《近代留日学生与直隸省教育近代化研究》、河北教育出版社、2016年。

169 洪亮《清末福建留日学生研究》、华侨大学硕士论文、2017年。

ループの特徴についての研究¹⁷⁰では、それぞれの地域の日本留学生の規模と特徴、日本での留学体験と帰国後の活動、当該地域の近代化事業への貢献などの面から、特色ある研究が行われている。

そのほか、田正平の『留学生と中国教育近代化』¹⁷¹、沈殿成の『中国人日本留学百年史』¹⁷²、安宇らの『留学生と中外文化交流』¹⁷³、楊暁の『中日近代教育関係史』¹⁷⁴、李喜所の『近代留学生と中外文化』¹⁷⁵、劉集林らの『中国留学通史（晚清卷）』¹⁷⁶、朱美祿の『域外の「鏡」に映る留学生像——現代の日本留学経験作家の創作を中心に』¹⁷⁷、桑兵の『交流与对抗——近代中日関係史論』¹⁷⁸、韓立冬の『近代日本の中国人留学生予備教育』¹⁷⁹、周棉らの『留学生グループと民国の社会発展』¹⁸⁰、周一川の『近代中国人日本留学の社会史——昭和前期を中心に』¹⁸¹といった著書では、中国人の日本留学の背景、日本留学生による中日文化交流、留学生が中国の近代化事業に果たした役割について様々な視点から論じられている。

清末における中国人留学生に関する史料の整理と出版に関しては、例えば、留学生の事務を管理していた「遊学生監督処」が刊行した『官報』¹⁸²、1903年浙江留日学生同郷会が刊行した『浙江潮』¹⁸³、1907年河南留日学生同郷会が刊行した『河南』¹⁸⁴がそれぞれ影印出版されている。留学生個人の日記あるいは回想録では、曹汝霖の『一生之回憶』¹⁸⁵、黄尊三の『黄尊三日記』¹⁸⁶が再版されている。

お雇い日本人に関する研究

清末のお雇い日本人として、当時中国各地の政府部門で採用された「政策顧問」、各種の学校で採用された「教習」など、多くの日本人が中国に渡って活躍していた。

中国国内でお雇い日本人について早い時期から研究を始めたのは汪向荣である。汪は1950年代から日本人教習に関する資料の収集・整理と研究を始め、実藤恵秀・阿部洋ら日

170 江盈盈《清末福建留日教育的动因、历程与学生群体特征研究》、《福建师范大学学报（哲学社会科学版）》、2019年第2期。

171 田正平《留学生与中国教育近代化》、广东教育出版社、1996年。

172 沈殿成主编《中国人留学日本百年史》（上下册）、辽宁教育出版社、1997年。

173 安宇、周棉主编《留学生与中外文化交流》、南京大学出版社、2000年。

174 杨暁《中日近代教育关系史》、人民教育出版社、2004年。

175 李喜所《近代留学生与中外文化》、天津教育出版社、2006年。

176 李喜所主编、刘集林等著《中国留学通史（晚清卷）》、广东教育出版社、2010年。

177 朱美祿《域外之镜中的留学生形象：以现代留日作家的创作为考察中心》、巴蜀书社、2011年。

178 桑兵《交流与对抗：近代中日关系史论》、广西师范大学出版社、2015年。

179 韩立冬《近代中国的留学生预备教育》、北京语言大学出版社、2015年。

180 周棉等《留学生群体与民国社会发展》、中国社会科学出版社、2017年。

181 周一川『近代中国人日本留学の社会史——昭和前期を中心に』、東信堂、2020年。

182 國家圖書館出版社編、呂順長整理《官報》（全十二冊）、國家圖書館出版社、2009年。

183 鲁迅等著、北京鲁迅博物馆编《浙江潮》（全十册）、中央编译出版社、2014年。

184 鲁迅等著、北京鲁迅博物馆编《河南》（全九册）、中央编译出版社、2014年。

185 曹汝霖《曹汝霖一生之回忆》、中国大百科全书出版社、2009年。

186 黄尊三著、谭徐锋整理《黄尊三日记》（上下册）、凤凰出版社、2019年。

本人学者の協力のもとで資料を収集し、紆余曲折を経て著書『日本教習』¹⁸⁷を書き上げた。同書では、清末に中国が日本人教師を採用した歴史的背景、教師の人数と分布、中国の新教育に対する影響に対して体系的な論述を行っている。さらに松本亀次郎、中島裁之などに関しても具体的に研究した。特に実藤恵秀らが整理した教師の名簿に基づいて作成した「日本教習分布表」は、新資料の入手が制限されていた時代では重要な成果とされ、その後中国学界に大きな役割を果たした。

李廷江が衛藤藩吉と共同で編集した『近代在華日本人顧問資料目録』¹⁸⁸は、日本外交史料館に所蔵されている『外国人雇用本邦人関係雑件』『中国雇用本邦人関係雑件』『中国雇用外国人雑件』『各国雇用本邦人関係雑件』『外国雇用本邦人』などの資料から、中国に採用されたお雇い日本人に関する資料のタイトルを計 2538 点選出して目録に編成したものである。李廷江は論文「戊戌維新前後の中日関係——日本の軍事顧問と清末の軍事改革」¹⁸⁹で、戊戌維新（1898）前後の日本人顧問採用に関する交渉過程を考察し、日本の軍事顧問がどのように清末軍事改革に関わったかを明らかにしようとした。

肖朗らの論文「日本人教習と京師警務学堂」¹⁹⁰は、京師警務学堂に採用された日本人教師を分析したものである。同学堂ではほぼ日本人教師が教育と教育行政管理を担当し、川島浪速が監督を務めたが、その主権は清政府の手にあったと論じている。ちなみに、同学堂は中国最初の近代警察教育機関として、清末の各地の警察学校の創設に参考となるモデルを提供した。

施克燦らの「日本人教習と清末師範教育の創始」¹⁹¹では、清末の師範学堂に日本人教習が多く採用された理由、その分布状況、教育活動、担当科目が調査された。清末の師範教育における日本人教習の地位と影響を分析することで、日本人教習の採用が教員の養成を加速させ、清末の師範教育の発展に役立ったと結論付けられた。

葉倩莹の「日本顧問と清末新政」¹⁹²では、清末の改革に日本人顧問関わった背景、「新政」時期の日本人顧問、憲政改革と日本人顧問の面から、改革に日本人顧問が及ぼした影響と課題、末期に減少した原因について考察された。

謝群の「近代在華日本顧問の研究——甲午戦争後から南京国民政府樹立まで」¹⁹³は、近代中国の日本人顧問を考察したものである。日本人顧問は、中日関係の変化に伴い、採用制から派遣制へと徐々に変化し、中国における日本人顧問が対中政策を実施するための重要な手段となっていたこと、その分布地域と活動が国内外の情勢の変化や日本の対中政策と密接な関係があったこと、一部の日本人顧問が中国に先進的な技術や理念を導入し、中国の近代化を推進する上で先導的役割を果たしたことを指摘した。

187 汪向荣《日本教習》、生活・读书・新知三联书店、1988年。

188 衛藤藩吉、李廷江編著《近代在華日人顧問資料目録》、中華書局、1994年。

189 李廷江《戊戌維新前后的中日关系：日本军事顾问与清末军事改革》、《历史研究》、1999年第2期。

190 肖朗、施崢等《日本教习与京师警务学堂》、《近代史研究》、2004年第5期。

191 施克燦、马忠虎《日本教习与清末师范教育的创始》、《教师教育研究》、2004年第3期。

192 叶倩莹《日本顾问与晚清新政》、中山大学博士论文、2015年。

193 谢群《关于近代在华日本顾问的研究：甲午战争后～南京国民政府成立》、东北师范大学博士论文、2018年。

熊達雲の『西洋法律の東漸——中国近代法制的構築と日本人顧問』¹⁹⁴は、多くの日本人顧問の中から有賀長雄、松岡義正、寺尾亨、副島義一などの人物を分析対象として選び、彼らが顧問として中国政府に採用された過程と目的、顧問在職中に担当した具体的な業務などについてミクロな研究を行い、日本人顧問が中国近代法制的構築において果たした役割を多方面から示したものである。

中国人日本視察者に関する研究

近代中国官民の対日視察は、留学生の派遣やお雇い日本人の採用と同じく、近代中国が日本を通じて近代的な科学技術を取り入れ、世界を認識するための重要な措置であった。

汪婉の『清末中国対日教育視察の研究』¹⁹⁵は、視察者が残した記録、日本外交史料館や中国第一史料館に所蔵されている一次史料をもとに、清末中国官民の対日教育視察について総合的な研究を行った著作である。

熊達雲の『近代中国官民の日本視察』¹⁹⁶は2編10章から構成され、第1編では、中国官民日本視察の過程、内容、日本側の対応について叙述し、第2編では、視察者の影響と役割を「近代日本の宣伝者」「立憲導入の提言者」「新制度試行の実験者」などと位置づけ、具体的な実例を通じて分析した。

孫雪梅の『清末民初における中国人の日本観——直隸省を中心に』¹⁹⁷は、清末の日本視察ブームの背景、直隸省官民の日本視察とその記録、日本の教育・実業の視察などの面から考察したものである。

拙著の『清末中日教育文化交流の研究』¹⁹⁸では、教育視察者のメンバー構成と現存の主要な教育視察記録の内容を紹介した上で、呉慶坻、張大鏞、程恩培、羅振玉らによる日本視察の過程とその影響を主に研究し、清末の日本教育視察が中国の教育近代化に与えた影響を分析した。

孔穎の『文明の窓口を開く——清末官紳の対日監獄視察の研究』¹⁹⁹では、対日視察者による近代西洋監獄制度の導入という視点から、近代中国が日本を媒介として選択的に近代西洋の法律制度を受け入れた過程が検討された。

羅晶の「李宗棠の日本視察の研究」²⁰⁰は、9回も日本視察を行った李宗棠という人物の視察記録をもとに、日本視察の背景、内容と影響を考察したものである。

そのほか、趙建民の『吳汝綸の日本視察と中国の学制近代化』²⁰¹、陳晴の『清末教育視察

194 熊達雲《洋律徂东：中国近代法制的构建与日籍顾问》、社会科学文献出版社、2019年。

195 汪婉『清末中国対日教育視察の研究』、汲古書院、1998年。

196 熊達雲『近代中国官民の日本視察』、成文堂、1998年。

197 孫雪梅《清末民初中国人的日本观：以直隶省为中心》、天津人民出版社、2001年。

198 呂順長《清末中日教育文化交流之研究》、商务印书馆、2012年。

199 孔穎《走近文明的橱窗：清末官紳対日監獄考察研究》、法律出版社、2014年。

200 羅晶《李宗棠日本考察之研究》、浙江工商大学硕士论文、2018年。

201 趙建民《吳汝綸赴日考察与中国学制近代化》、《档案与史学》、1999年第5期。

による体育教育法の導入とその価値²⁰²、許海華の「1902年の吳汝綸日本考察について」²⁰³、陳丹の『清末海外視察の政治大臣』²⁰⁴、蔡一村の「吳汝綸日本教育視察の研究」²⁰⁵、王少芳の「清末直隸官紳の日本教育視察」²⁰⁶、段曉輝の「清末の教育視察記録の中の日本的価値観についての研究」²⁰⁷、王禹霈の「清末官紳による日本農工商視察記録の研究——農工商視察の関連著作を例として」²⁰⁸、拙稿「清末中国人日本視察旅行記に見る筆談記録——吳汝綸の『東遊叢録』を中心に」²⁰⁹、徐偉民の「吳汝綸の日本師範教育視察及びその影響」²¹⁰といった論著でも、様々な視点から研究が進められている。

清末中国人の対日視察記録の整理と出版も比較的早い時期から推進されていた。王寶平の監修による『晚清中国人日本考察記集成』（後に『晚清東遊日記彙編』に変更）として、『教育考察記』（上下冊）²¹¹、『日本政法考察記』²¹²、『遊歴日本図経』²¹³、『日本軍事考察記』²¹⁴、『中日詩文交流集』²¹⁵が相次いで影印出版されたほか、鐘叔河の監修による『走向世界叢書』²¹⁶、朝華出版社が影印出版した『清末民初文獻業刊』²¹⁷にも多くの日本視察記が収録されている。点校本では武安隆・劉玉敏の整理による『嚴修東遊日記』²¹⁸、李興武の整理による李宗棠の『東遊紀念』²¹⁹と『考察日本學校記』²²⁰、鄭曉霞の整理による盛宣懷の『愚齋東遊日記校注』²²¹がある。日本語訳本では楊晶らの翻訳による張騫の『東遊日記』²²²がある。

日本語書籍の翻訳と中日語彙交流に関する研究

甲午戦争以前、中国語による日本語書籍の翻訳は少なく、比較的多く行われた洋書の翻

-
- 202 陈晴《清末教育考察对体育的引进及其价值》、《武汉体育学院学报》、2006年第9期。
- 203 許海華「1902年の吳汝綸日本考察について」、『千里山文学論集』第82号、2009年。
- 204 陈丹《清末考察政治大臣出洋研究》、社会科学文献出版社、2011年。
- 205 蔡一村《吳汝綸日本教育考察之研究》、西南大学硕士论文、2012年。
- 206 王少芳《清末直隸官紳的日本教育考察》、《教育评论》、2013年第3期。
- 207 段曉輝《清末“教育考察记”中的日本价值观教育研究》、上海社会科学院硕士论文、2016年。
- 208 王禹霈《清末官紳日本農工商考察类著作研究：以農工商考察类著作为例》、苏州大学硕士论文、2016年。
- 209 呂順長「清末中国人日本視察旅行記に見る筆談記録——吳汝綸の『東遊叢録』を中心に」、『中国研究月報』、2017年8月号。
- 210 徐偉民《吳汝綸对日本师范教育的考察及其影响》、《安庆师范大学学报（社会科学版）》、2018年第2期。
- 211 王寶平主編、呂順長編著《晚清中國人日本考察記集成：教育考察記》（上下冊）、杭州大學出版社、1999年。
- 212 王寶平主編、劉雨珍、孫雪梅編《晚清東游日記彙編：日本政法考察記》、上海古籍出版社、2002年。
- 213 王寶平主編、傅雲龍著《晚清東游日記彙編：游歴日本圖經》、上海古籍出版社、2003年。
- 214 王寶平主編《晚清東游日記匯編2：日本軍事考察記》、上海古籍出版社、2004年。
- 215 王寶平主編《晚清東游日記匯編2：中日詩文交流集》、上海古籍出版社、2004年。
- 216 鐘叔河等主編《走向世界叢書》、岳麓書社、初編1984-1986年、續編2016-2017年。
- 217 朝華出版社編《清末民初文獻叢刊》、朝華出版社、2017-2019年。
- 218 嚴修撰、武安隆、劉玉敏點注《嚴修東游日記》、天津人民出版社、1995年。
- 219 李宗棠撰、李興武校點《東遊紀念》、黃山書社、2016年。
- 220 李宗棠輯、李興武校點《考察日本學校記》、黃山書社、2019年。
- 221 盛宣懷撰、鄭曉霞、閻琳校注《愚齋東游日記校注》、廣陵書社、2018年。
- 222 張騫著、楊晶、白立文譯《東游日記》、中國江蘇省南通博物院、1996年。

訳と比べて、あまり注目されなかった。甲午戦争後、日本語翻訳の重要性が認識され、日本語学校の設立と日本書の翻訳が急速に増えた。特に20世紀初頭、数万人の留学生が日本に押し寄せ、彼らが日本書翻訳の主力となった。日本書籍の翻訳は、近代の科学技術と文化を輸入することに大きく貢献しただけでなく、和製漢語の語彙の輸入にも重要な役割を果たした。この分野において、日本語の漢字語彙の輸入を中心とした中日語彙交流の研究が進んでいる一方、日本語書籍の翻訳についての研究は相対的に遅れている。

高名凱・劉正焱の編集による『漢語外来語辞典』²²³には、中国語の外来語として1万語余りが収録されており、そのうち日本語から来た語が約800語収録されている。同辞典は『現代漢語外来語研究』²²⁴をもとに増補・改訂したもので、日本語由来の外来語を体系的に整理した辞書である。王立達は「日本語から借用した現代中国語の語彙」²²⁵という論文を発表し、19世紀以降に日本語から借用した語を分類し、それぞれ例を挙げている。

譚汝謙の編集による『中国訳日本書総合目録』²²⁶は、中国語に翻訳された日本語書籍に関する最初の総合目録であり、その中には1883年から1978年までに出版された5765点（そのうち1883年から1911年までは970点）の書目が収録されている。

陳力衛の『和製漢語の形成とその展開』²²⁷は、和製漢語発生の文化的素地、音韻変化による表記の変容、近代における和製漢語の生成などの面から、和製漢語の形成・発展・変容の過程について論じたものである。陳力衛の近著『東往東来——近代中日間の語詞概念』²²⁸は、3編18章から構成されている。そのうち、第1編では、19世紀の『英華辞典』『博物新編』『万国公法』及び江南製造局による西洋学新書が日本にもたらした影響を重点的に考察した。第2編では、20世紀における日本語語彙の中国に対する影響に着目している。梁啓超の『和文漢読法』、政治小説『雪中梅』及び『共産党宣言』の翻訳を分析することを通じて、近代中国語のなかの日本語要素などを明らかにした。第3編の「言葉の概念が決まる」では、「民主」「共和」「主義」「優勝劣敗、適者生存」「金字塔」といった言葉の概念の形成過程を具体的に分析した。

朱京偉の『近代日中新語の創出と交流——人文科学と自然科学の専門語を中心に』²²⁹では、哲学、音楽、植物学など人文・自然科学分野の専門語を中心に、近代日本の漢字新語の形成と発展の歴史、及び留学生の翻訳による現代中国語への影響を検討した。朱京偉の新著『近代中日語彙交流の軌跡——清末の新聞にみる日本語借用語』²³⁰では、清末に発行されていた『時務報』『清議報』『訳書彙編』『新民叢報』『民報』を基本資料として調査と分析を行い、日本語の語彙が中国語へ流入する歴史的過程を明らかにした。

223 刘正焱等编《汉语外来词词典》、上海辞书出版社、1984年。

224 高名凱、刘正焱《现代汉语外来词研究》、文字改革出版社、1958年。

225 王立达《现代汉语中从日语借来的词汇》、《中国语文》、1958年第2期。

226 譚汝謙主編《中國譯日本書綜合目録》、中文大學出版社、1980年。

227 陳力衛『和製漢語の形成とその展開』、汲古書院、2001年。

228 陈力卫《东往东来：近代中日之间的语词概念》、社会科学文献出版社、2019年。

229 朱京偉『近代日中新語の創出と交流——人文科学と自然科学の専門語を中心に』、白帝社、2003年。

230 朱京偉《近代中日词汇交流的轨迹：清末报纸中的日语借词》、商务印书馆、2020年。

李運博の『中日近代語彙の交流——梁啓超の役割と影響』²³¹は、主に梁啓超の著作に使用された日本語借用語について整理と研究を行っている。李運博の近著『近代における漢日語彙交流の研究』²³²では、近代の中国語と日本語における漢字語彙の交流を研究対象とし、歴史学研究的観点から両国の語彙交流の背景、発生と発展の歴史的な経緯を明らかにしようとしている。

沈国威の『近代中日語彙交流の研究——漢字新語の生成、受容と共有』²³³は、近代における中日語彙交流の歴史を詳細に分析している。漢字文化圏における新語や訳語の生成、交流、受容、定型という全過程をたどり言語接触、語彙交流の基本的な規則を明らかにしたものである。ちなみに、同書の元となる『近代日中語彙交流史——新漢語の生成と受容』は2002年に笠間書院から出版され、中国語版の改定版『新語往還：中日近代語言交涉事』は2020年に社会科学文献出版社から出版されている。沈国威の近著『漢語の近代二字語の研究——言語接触と漢語の近代の変遷』²³⁴では、中国語二字化のメカニズム及びその史実を明らかにしようとし、近代の二字語は主に東と西、東と東（中日）の言語と文化の接触によるものであると主張した。

そのほか、拙論「清末における浙江出身の早期日本留學生の翻訳活動について」²³⁵、張鉄榮の「魯迅と周作人の日本文学翻訳観」²³⁶、李孝遷の「清季における支那史、東洋史教科書の翻訳と紹介についての初歩的な考察」²³⁷、劉明明的「清末日本留學生の文化伝播——『訳書彙編』と『遊学訳編』を中心に」²³⁸、李広超の「近代中国人日本留學生の翻訳活動（1896～1937）」²³⁹、呂超の「清末における日本語翻訳者沈紘の翻訳活動についての初歩的な考察」²⁴⁰、杜京容の「清末の日本留學生の翻訳活動の原因、内容と影響を論じる」²⁴¹、葛文峰の「清末の日本留學生の翻訳活動と救国探索——『訳書彙編』と『遊学訳編』を中心に」²⁴²といった論文でも、それぞれの視点から清末中国人日本留學生の翻訳活動などについて研究している。

日本人の訪中記録に関する研究

清朝末期、多くの日本人官民が様々な目的で中国に訪れており、その中には中国見聞録や旅行記を残した人も少なくなかった。張明傑の分類によると、訪中の日本人には、官僚

231 李運博《中日近代词汇的交流：梁启超的作用与影响（日文版）》、南开大学出版社、2006年。

232 李運博《近代汉日词汇交流研究》、外语教学与研究出版社、2018年。

233 沈国威《近代中日词汇交流研究：汉字新词的创制、容受与共享》、中华书局、2010年。

234 沈国威编著《汉语近代二字词研究：语言接触与汉语的近代演化》、华东师范大学出版社、2019年。

235 呂順長《清末浙江籍早期留日学生之译书活动》、《杭州大学学报（哲学社会科学版）》、1996年第2期。

236 張鉄榮《魯迅と周作人の日本文学翻訳観》、《魯迅研究月刊》、2003年第10期。

237 李孝遷《清季支那史、東洋史教科書介譯初探》、《史學月刊》、2003年第9期。

238 劉明明《清末留日學生的跨文化傳播：〈譯書彙編〉與〈遊學譯編〉》、廈門大學碩士論文、2007年。

239 李廣超《近代中國留日學生的譯書活動（1896～1937）》、《廣西社會科學》、2008年第5期。

240 呂超《清末日語翻譯沈紘譯介活動初探》、《浙江外國語學院學報》、2013年第1期。

241 杜京容《論清末留日學生譯書活動的原因、內容及影響》、《河南圖書館學刊》、2015年第4期。

242 葛文峰《清末留日學生的報刊編譯與救國探索：以〈譯書彙編〉與〈遊學譯編〉為中心》、《邢台學院學報》、2015年第1期。

や政治家、軍人や大陸浪人、学者や留学生、記者や編集者、作家や芸術家、教員や教育関係者、実業家や商人、宗教関係者、一般の民間人が含まれている。彼らの中国観察の角度、中国に対する理解、残した記録はそれぞれ特色があり、彼らの訪中活動についての研究も近代における中日文化交流史研究の重要課題である。

張明傑は長年にわたり近代日本人の中国旅行記の研究に取り組み、「明治前期の中国遊記——岡千仞の『観光紀遊』について」²⁴³、「明治期最初の中国西部奥地への旅——竹添進一郎及びその『棧雲峽雨日記並詩草』について」²⁴⁴、「明治後期の中国紀行——山本憲『燕山楚水紀遊』について」²⁴⁵、「明治期日本人の観た万里の長城——大鳥圭介『長城遊記』を中心に」²⁴⁶、「明治漢学者の中国旅行記」²⁴⁷、「明治時代における日本人中国旅行記の関連文献についての概説」²⁴⁸、「近代日本人の中国辺境調査及びその関連文献」²⁴⁹などの論文を発表している。さらに同氏が監修を担当した叢書『近代日本人中国遊記』²⁵⁰には、清末と民国初期に訪中した日本人の遊記『北中国紀行／清国漫遊志』（曾根俊虎著、範建明訳、2007）、『横跨中國大陸：遊蜀雜俎』（中野孤山著、郭拳昆訳、2007）、『中國遊記』（芥川龍之介著、秦剛訳、2007）、『燕山楚水』（内藤湖南著、呉衛峰訳、2007）、『考史遊記』（桑原鷲藏著、張明傑訳、2007）、『中國印象記／滿韓漫遊』（小林愛雄／夏目漱石著、李煒／王成訳、2007）、『棧雲峽雨日記／葦杭遊記』（竹添進一郎／股野琢著、張明傑整理、2007）、『我的留學記』（吉川幸次郎著、錢婉約訳、2008）、『北京紀事／北京紀遊』（小栗棲香頂著、陳繼東等整理、2008）、『中國漫遊記／七十八日遊記』（徳富蘇峰著、劉紅訳、2008）、『中國文明記』（宇野哲人著、張学鋒訳、2008）、『観光紀遊／観光統紀／観光遊草』（岡千仞著、張明傑整理、2009）、『1862年上海日記』（日比野輝寛、高杉晉作等著、陶振孝等訳、2012）が収録されている。

上海の日本人居留民は明治初期にはわずか数人しかいなかったが、1940年代初期には10万人以上に達し、上海の外国人社会の重要な構成部分になっていた。陳祖恩は長期にわたって上海日本人居留民の研究に携わり、『東洋人を訪ねる——近代における上海の日本人居留民（1868～1945）』²⁵¹では、近代における上海の日本人居留民についてその移住と発展から上海を離れるまでの過程を研究し、彼らの経済、文化、社会における主要な活動をたどった。また陳は『上海日本人居留民社会生活史（1868～1945）』²⁵²においても、より豊富

243 張明傑「明治前期の中国遊記——岡千仞の『観光紀遊』について」、*Journal of hospitality and tourism* vol. 1, no. 1, 2005.

244 張明傑「明治期最初の中国西部奥地への旅——竹添進一郎及びその『棧雲峽雨日記並詩草』について」、*Journal of hospitality and tourism* vol. 2, no. 1, 2006.

245 張明傑「明治後期の中国紀行——山本憲『燕山楚水紀遊』について」、*Journal of hospitality and tourism* vol. 3, no. 1, 2007.

246 張明傑「明治期日本人の観た万里の長城——大鳥圭介『長城遊記』を中心に」、*Journal of hospitality and tourism* vol. 4, no. 1, 2008.

247 張明傑《明治漢学家的中国游记》、《读书》、2009年第8期。

248 張明傑《明治时期日本人的中国游记文献综述》、《日语学习与研究》、2013年第5期。

249 張明傑《近代日本人涉华边疆调查及其文献》、《国际汉学》、2016年第1期。

250 張明傑主编《近代日本人中国游记》、中华书局、2007-2012年。

251 陳祖恩《寻访东洋人：近代上海的日本居留民（1868-1945）》、上海社会科学院出版社、2007年。

252 陳祖恩《上海日侨社会生活史（1868-1945）》、上海辞书出版社、2009年。

な資料と独自の視角をもって上海日本人居留民社会の形成、発展と強制退去の歴史的な過程を論述している。徐静波は和田博文らと共同で著した『上海の日本人社会とメディア 1870-1945』²⁵³で、上海で刊行された各種の雑誌を主な資料として、近代における上海の日本人社会の歴史を考察した。

おわりに

以上、清末、中華民国時代、現代に分けて年代順に中国学界における清代の中日文化交流史に関する研究を紹介したが、特に1980年代以降の研究成果が多く、本稿だけでは到底紹介しきれない。例えば、関連人物の往来書簡の研究、孫文や魯迅などよく知られる人物に対する研究、思想・文学・美術・音楽分野の交流に関する研究、通史的にまとめられた中日交流史の叢書に含まれる清代中日文化交流史の研究など、いずれも多く研究成果があがっている。

本稿で紹介した成果からも分かるように、中国の学界における清代中日文化交流史の研究は大きく進展している。これは、単に研究者数と研究成果数が増加しているだけでなく、時間の推移に伴う研究成果の質の向上にも反映されている。全体的に見れば、マクロ的な研究とミクロ的な研究がともに重視されている。それと同時に、点（個別の事例）、線（特定の期間）、面（特定の範囲）に関する研究が有機的に結び付けられ、特定の出来事に焦点を絞った事例研究が増え、歴史資料の発掘と整理も進んでおり、研究は精細化の方向へ進んでいる。

いうまでもなく、文化交流史の研究も海外の研究者との交流により大きく促進されるもので、中国の学界であげられた清朝中日文化交流史の研究成果も海外特に日本人研究者から学術的恩恵を受けたものも少なからずあったであろう。しかし、周知の通り日本では現在、在日中国人を除けば、「日中交渉史」や「日中文化交流史」を専門分野とする研究者は減少しており、この分野の研究者と言えば、人数的には中国人が圧倒的に多い。外国の研究者との交流により、国による立場や視点、発想の違いから大きく学術的刺激を受けることがしばしばある。これまでと同じように、今後この分野の研究においても、中日両国の研究者の交流と協力が大いにあってほしいものである。

253 和田博文、徐静波ほか『共同研究 上海の日本人社会とメディア 1870-1945』、岩波書店、2014年。

Chinese Research on the History of Cultural Exchanges between China and Japan during the Qing Dynasty

LYU Shunchang*

In Chinese academic circles, research into the history of cultural exchanges between China and Japan during the Qing dynasty began as early as the end of the Qing dynasty. Such activities have continued unabated in the one hundred years since, and as a result a significant body of research has accumulated, despite fluctuations in the relationship between the two countries, and the changes in the domestic situation in China. This article introduces some of the major works in this field of research, and divides them into two periods: the late Qing Dynasty and the Republic of China; and the contemporary period since the foundation of the People's Republic of China.

Keywords: Japan and the Qing Dynasty, Japan-China cultural exchange, Japan-China relations, Chinese exchange students in Japan

* Professor, Zhejiang Gongshang University